

## 第七章 光る源氏の物語 六条院造営

[第一段 二月二十日過ぎ、朱雀院へ行幸]

\*朔日にも(ついたちにも、元旦でも)、大殿は\*御ありきしなければ(太政大臣は宮中参賀にお出掛けなさらないので)、のどやかにておはします(のんびりとしていらっしゃいます)。\*注に<源氏三十四歳の春正月元旦。>とある。\*注に<太政大臣の源氏は宮中参賀はしなくてもよい。>とある。

\*良房の大臣と聞こえける(藤原良房大臣が始めたと言われる)、いにしへの例になずらへて(前例に倣って)、\*白馬ひき(二条院の庭に青馬を牽き出して)、\*節会の日(七日の祝いの日は)、内裏の儀式をうつして(御所での儀式を真似て)、昔の例よりも事添へて(昔の例よりも催し物を多くした)、いつかしき御ありさまなり(盛大な御宴会でした)。\*「よしふきのおとど」は注に<藤原良房(八〇四~八七二)、諡忠仁公。人臣として初の摂政関白となる。白馬を私邸で牽いたという例は記録に見えないが、それを真似て源氏の二条院に白馬を牽くとする。>とある。\*「あをうまのせちゑ」は<上代・中古、朝廷の年中行事の一。正月七日、天皇が紫宸殿(ししんでん)で左右馬寮(めりよう)の官人の引く二一頭の「白馬」を見たのち、宴を催した。平安時代に恒例となった。この日、「白馬」を見れば年中の邪気を除くという中国の俗信によったもの。七日の節会。>と大辞林にある。\*「せちゑ」は注に<『集成』は「正月の節会には、元日の節会、七日の白馬の節会、十四日の男踏歌、十六日の女踏歌がある」と注す。>とある。良くは分らないが、宮中行事には二種類あるようで、正月祝賀のような儀礼化した行事は中務省が伝統に則って執行する式典で、政務に与しないいわゆる伝統行事であり、今ひとつは諸侯が参画してその都度に内容を取り決める催し物で、これはその調整こそが政務、ということなのだろうか。それにしても、大臣が率先して宮中年賀に列席するのは其形に重みの有る事に思えるが、「おんありきしな」いで「うちのぎしきをうつし」た、というのだから意外だ。で、伝統行事の年賀では一定の格式を持って執り行われる宮中行事とは別に、各戸は各自各様に年始を祝うのであり、大臣はその権勢に見合った独自の宴席を開いた、という記事だと理解しておく。

如月の二十日あまり(仲春二月二十日過ぎに)、朱雀院に行幸あり(帝の朱雀院御園遊があります)。花盛りはまだしきほどなれど(花見の盛りにはまだ早かったが)、弥生は\*故宮の(三月は故母宮の)御忌月なり(おんきづき、御命月だからでした)。\*注に<藤壺は一昨年(源氏三十二歳の春三月)に崩御した。>とある。

とく開けたる桜の色もいとおもしろければ(早咲きの桜もあって目出度く)、院にも御用意ことにつくろひ磨かせたまひ(院におかれても宴席を念入りに美しく飾りなさって)、行幸に仕うまつりたまふ(参列申し上げる人々は)上達部、親王たちよりはじめ(要人や王族をはじめとして皆が)、心づかひしたまへり(最上に着飾っていました)。

人びとみな(その人たちは皆)、\*青色に(青い上着に)、桜襲を着たまふ(赤布の上に白布を重ね着した内着を着ていらっしゃいます)。\*「あをいろ」は注に<行幸に供奉する人々の服装は翹塵の袍に桜の下襲。翹塵の袍は常は天皇が着用するが、晴れの儀式の折には、諸臣に翹塵の袍を賜り、帝は赤色の袍をお召しになる。また最上席の公卿も同じ赤色を着用するという(西宮記・河海抄)。>とある。その「翹塵(きくぢん)」は<色の名。灰色がかつた黄緑色。染め色では紫根(しこん)と刈安(かりやす)で染める。織り色では縦糸を青、横糸

を黄で織る。天皇の袍(ほう)の色で禁色(きんじき)とされた。きじん。きちん。>と大辞泉にあり、また「麴塵の袍」の略ともある。「麴塵の袍」は<天皇が賭弓(のりゆみ)、臨時祭、5月の競(くら)べ馬などの略儀に着用する袍。麴塵色で、文様は黄櫨染(こうろぜん)と同様に桐・竹・鳳凰(ほうおう)を表す。近世では尾長色唐草も使われた。青色の袍。>とある。ところで、色見本をWeb検索すると「麴塵」は青ねず色という感じだが、実際の織物としては濃淡や色向きに相当な幅がある上に、光の加減で色合いが変化するようだ。気に入ったのは、おひなさまの製造メーカー株式会社天鳳堂のWebサイトの皇室シリーズ雛人形コーナーに、「青色御袍」と「麴塵御袍」のページそれぞれに御袍着衣人形の見本写真があって、いずれも「青色」ながら「青色御袍」は高貴な青ねずで上達部や親王に、「麴塵御袍」はかなり青黒っぽい袍で蔵人に、と相応しそうな印象を受けた。勝手ついでに、そのページにあった人形の内着を「桜襲」と考えて、赤い下着に白い中着とのように言い換えた。

帝は、\*赤色の御衣たてまつれり(桜色の上着をお召しあそばします)。 \*「あかいろ」は<古代・中世の染め色の名。茜(あかね)と櫨(はじ)とで染めた、赤に黄みが加わった色。禁色(きんじき)の一。赤白櫨(あかしろつるばみ)。>と大辞泉にあり、また<「赤色の袍(ほう)」の略。>ともある。「赤色の袍」は<赤色に染めた袍。太上(だいじょう)天皇が束帯を着用するとき用いた。地は綾、文様は八重菊・菊唐草が普通。赤色の御衣(おんぞ)。>とある。「赤白櫨」の色見本は薄いピンクで桃色、というか桜色だ。

召しありて(また、帝のお招きがあって)、太政大臣参りたまふ(源氏大臣も参列なさいます)。おなじ赤色を着たまへれば、いよいよひとつものとかかやきて見えまがはせたまふ(いよいよ御二人は美しく輝いて一つに同化したように見間違ふほどでいらっしやいます)。

\*人びとの装束、用意、常にことなり(朱雀院の給仕係の奉公人たちの身だしなみや接客も何時に無く行き届いていました)。 \*この文には敬語表現が無いので、「人びと」は客人では無い。ということは、迎える側の奉仕者なのだろう。また、「しやうぞく」は<衣装>自体でもあるが、<正装すること>でもあり<着付け、装い、出で立ち、身支度、身づくろい>である。「ようい」は<支度、準備>でもあるが、<心を用いること>の語意であり<気を付けること、注意すること>は即ち<気遣い>であり<接客態度>である。

院も(院ご自身も)、いときよらにねびまさらせたまひて(とても美しく年を重ねていらして)、御さまの用意(身だしなみに気をつけて)、なまめきたる方に進ませたまへり(とても優雅なご様子になっていらっしやいました)。

今日は(この日は帝は)、\*わざとの文人も召さず(一人前の漢詩人などはお呼びにならず)、ただその才かしこしと聞こえたる\*学生十人を召す(ただ詩文の才能が高いと評判の学生十人をお呼びになっていました)。 \*「わざとの」は「わざ(職業人)」「との(としての)」だから、<一人前の>や<一才の>。また、「文人(もんじん)」は<漢詩文に長けた人。特に「文章生」をいう。>とある。「文章生(もんじやうしやう)」は、大学寮の寮試に合格した者が擬文章生として受験資格を得た式部省の省試に合格した者、とあるから其自身が有資格者を示していて、ざっと学識者なのだろう。 \*この「学生(がくしやう)」が擬文章生。

式部の司の試みの題をなすらへて(その学生たちは式部省の試験を倣って)、御題賜ふ(勅題を賜ります)。大殿の太郎君の試みたまふべきなめり(帝は太政大臣の御長男の実力をお試しになって昇進の一助になさろうということのようでした)。臆だかき者どもは(臆しやすい学生などは)、ものもおぼえず(御前の作詞ということで気も動転して)、\*繫がぬ舟に乗りて池に放れ出でて(ひ

とりひとり別々の船に乗って池に漕ぎ出されるという試験方法に)、いと術なげなり(まるで詩文が思いつかないようでした)。\*「つなぐ」は<連結する>。「つなぐぬふね」は<別々の船>。なお、「省試」について「永子の窓」という Goo ブログに<この物語の作られた 50 年ほど前の、応和元年 (961 年) に、村上天皇は桜花の宴を催し、文人たちに題を与えて詩を作らせ、更に擬文章生 20 人に題を与え、カンニングをしないように、池の中島に放って作詩の試験をしている。これを「放島の試」という。このように式部省の行う試験は、天皇の催しの中で行われることもあった。>という記事があり、「放島試」は中国では良く知られた試験方法らしい。また、風俗博物館の展示に「放島試」を見たという Web サイトが多く有った。いかにも下敷きがありそうな此処の言い回しに注釈が無いのはとても意外だ。

日やうやうくだりて(日が次第に暮れてきて)、\*楽の舟ども漕ぎまひて(二艘一对の楽奏船が漕ぎ回り)、調子ども奏するほどの(色々な曲が奏でられる時に)、山風の響きおもしろく吹きあはせたるに(山風の音が風情良く吹き合うと)、冠者の君は(無官の若君は)、\*「がくのふね」は<中で音楽を奏する船、普通、竜頭鷓首(りょうとうげきす)の船を用いた。>と古語辞典にある。「竜頭鷓首」は<船首に竜の頭と鷓の首をつけた二艘(そう)一对の船。平安・鎌倉時代、朝廷の行事、社寺の祭礼供養、貴族の遊宴などの際に楽人や舞人を乗せて池川に浮かべ、管弦を奏した。>と大辞林にあり、古語辞典には<竜は水をわたり、鷓(サギ)に似て大きく、羽の白い想像上の鳥)は風を恐れぬといわれ、船が溺れないようにとの意に基づくという。>と説明されている。

「かう苦しき道ならでも交じらひ遊びぬべきものを(こんな苦勞をしなくても私の家柄なら諸侯と交じらって管弦を楽しめるはずのものを)」と、世の中恨めしうおぼえたまひけり(今の立場に遇されている身の上を恨めしくお思いになりました)。

「春鶯囀(しゅんあうてん)」舞ふほどに(この日の舞人が踊るときに)、\*昔の花の宴のほど思し出でて、院の帝も、\*注に<「花宴」巻、源氏十九歳春のこと。>とある。普通は四人舞いであるらしい「春鶯囀(はるのうぐいすのさえづり)」の一部真似振りを光君が時の春宮とは今の朱雀院に乞われて独り舞いした時の、15 年前の描写は「やうやう入り日になるほど、春の鶯囀るといふ舞、いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉の賀の折、思し出でられて、春宮、かざしたまはせて、せちに責めのたまはするに、逃がれがたくて、立ちてのどかに袖返すところを一折れ、けしきばかり舞ひたまへるに、似るべきものなく見ゆ。」という次第だった。こうしてこの異母兄弟の屈託の無い仲の良さを述べた上で、作者はこの宴の夜に浮かれた光君をして、兄宮の許嫁であった有明の君に、その人とは知らずにだが、その可能性は十分に予見できた上での遊び心で、強引に情交を果たすという設定で、青春の狂おしさを表現した名場面を演出していた。

「また、さばかりのこと見てむや(また、あんなふう面白いことがないかなあ)」

とのたまはするにつけて(と仰ったのを受けて)、その世のことあはれに思し続けらる(源氏大臣も過ぎた青春の日々を感慨深く次々と思い出さいます)。

舞ひ果つるほどに、大臣、院に御土器参りたまふ(御盃を差し上げて、こう詠まれます)。

「鶯のさへづる声は昔にて、睦れし花の蔭ぞ変はれる」(和歌 21-11)

「昔ながらの鶯を、涙ながらに懐かしむ」(意識 21-11)

\*「むかし」は「向かし」だから＜向こう側に気持ちが向かっている→昔が偲ばれる＞。「にて」は前述を後述の事由説明とする接続助詞の＜なので＞なので、「むかしにて」は＜昔が懐かしく思われて＞となるが、後述が「ぞ変はれる」という存外の反転文なので、逆接して＜昔が恋しいのに＞となる構文。「はなのかげ」は＜花の咲いている木の下での宴＞を意味するらしいが、「むつれし(親しく遊んだ)」と懐古する「花」は＜桐壺院＞であり、「はなのかげ」は＜父帝の庇護の下での和み＞も複意する。平易な言い回しのようにも、用いる語は用意周到、というところだろうか。この二人が、このように、この日を迎えることは其形に感慨深く、さりげなく語るほど目出度さが滲み出るといふ事では有るのかも知れない。

院の上(院の上はこう御返歌なさいます)、

「九重を霞隔つるすみかにも、春と告げくる鶯の声」(和歌 21-12)

「すっかり遠い山里に、賑わう春の鳥の声」(意識 21-12)

\*「このへ」は、そのまま＜幾重＞であり＜何重にも離れていること＞を示すと共に、＜《昔、中国の王城は門を九重につくったところから》宮中。禁中。＞のことと大辞泉にある。「かすみ」は、＜霞んで見えにくい＞状態から＜遠く＞を意味すると共に、「霞の洞(かすみのほら)」の語用から＜上皇御所＞を示すことが古語辞典に説明されている。「霞の洞」とは、俗世を離れた仙人の霞を食って暮らす聖人ぶりを理想視して＜仙人の住処＝仙洞＞を示し、その「仙洞(せんとう)」が退位した天皇の住まいに相応しいという考えから院の御所を「仙洞御所」と言い、即ち「霞隔つる住処」は＜上皇御所＝院＞となる、とのこと。なので、「九重を霞隔つるすみかにも」は＜宮中を遠く離れたこの朱雀院にも＞という意味だが、朱雀院の史跡は千本通り(かつての朱雀大路)西側の三条から四条へ抜ける広大な邸宅であつたらしく、＜遠く離れた＞は帝位を退いて権勢から離れた気持ちの喩えとして洒落た言い回し、ということだ。歌の趣向は光君の「睦れし花の蔭ぞ変はれる」を受けて、院は「いや、そうは言っても現にこうして皆で我が邸に春の賑わいを告げに来てくれて嬉しい」と応える。

\*帥の宮と聞こえし(大宰府元帥と聞こえた御方は)、今は兵部卿にて(今は兵部省長官にお成りで)、\*今の上に御土器参りたまふ(今上帝に御盃を差し上げて、こうお詠みになります)。\*「そちのみや」は光君の弟宮で最も仲の良い兄弟として、詳しい描写は無いものの多くの場面に登場する。肩書きは親王の名誉職なので実権は無く、身分と報酬を表しているのだろう。それにしても、八省の一つたる兵部省(ひょうぶしょう)の職掌は良く分からない。名称からは軍部だろうし、今の防衛省かとも思うが、今の日本の防衛省に内実が感じられないということを差置いても、軍事実務の主体は軍隊だろうし、その組織立ては状況に応じて変わるだろうし、まして当時の情報収集および分析能力も中央本部よりは現地に近い部隊の作戦本部こそが有効だったはずで、現に対外部隊としては大宰府が在り、中央には三衛府があり、地方は受領が実力統治していたので、およそ名目上の軍事事務や給与管理くらいしか想像出来ない。いや、もしかすると軍人の人事統括こそが主たる職掌だったのかも知れない。ただ、いずれにしても兵部卿宮が大変な貴人であることは間違い無い。また「帥の宮」をWeb検索すると、当時の歌人仲間で「帥の宮」と言えば、和泉式部と浮名を流した冷泉天皇の第四皇子だった敦道親王(あつみちしんのう)を指したらしく、物語の脈絡とは別に艶っぽい雰囲気のある代名詞だったのかもしれない。\*「今上帝」は桐壺帝の末子なので、とはいえ実は光君の子なのであくまで表向きの話だが、この場の四人の異母兄弟の中で最年少。朱雀院 37 歳、光君 34 歳、兵部卿宮は不明、今上帝 16 歳。

「いにしへを吹き伝へたる笛竹に、さへづる鳥の音さへ変はらぬ」(和歌 21-13)

「昔ながらに集い舞う、さへづる春の賑やかさ」(意識 21-13)

\*「いにしへ」は「往にし方」で<過ぎた日>であり<往時の花の宴の賑わい>を示すと同時に、光君の「睦れし花の蔭」の意を受けて<古来からの由緒=帝位>も滲ませる。「吹き伝ふ」は<思い出させる>と<伝統を示す>。「ふえたけ」は<笛の演奏>と<様式美>。「囀るとりのね」は<春の華やぎ>と<居並ぶ諸侯の忠誠>。この歌は今現在の雅を讃えているから、朱雀院と今上帝の双方に対して催事の成功を慶び申しているのだろう。

あざやかに\*奏しなしたまへる(見事に二人の歌の言葉を取りこんで帝に申し上げなされた宮の)、用意ことにめでたし(心用意はまことに場慣れて上手でした)。取らせたまひて(帝は宮に御返杯させなされた)、\*「奏す」は<天皇に申し上げる>と言う美辞だが、歌に詠んだ「笛竹」に掛けて「あざやかに」の修辞を含めた洒落詞になっている、のだろう。

「鶯の昔を恋ひてさへづるは、木伝ふ花の色やあせたる」(和歌 21-14)

「此処でさへづる鶯は、内の桜に飽きたのか」(意識 21-14)

\*この歌の表面は全く洒落言葉の言い回しになっている。この場に於いては既に、「うぐいす」は<列席者>、「むかしをこひて」は<此処に雅を求めて集いて>、「さへづる」は<賑やかに酒宴に興じる>、「こづたふ」は<この朱雀院の由緒を称える>、「はなのいろ」は<帝たる自分の威光>、を意味している。それが「あせたる(衰えている)」とは、帝位にあるまじき身内ゆえの寛ぎ、なのだろう。

とのたまはする御ありさま(と御唱和なさいます御姿は)、こよなく\*ゆゑゆゑしくおはします(実に血縁を懐かしんで御出でです)。これは御私さまに(この御祝杯の歌詠みは御兄弟だけの)、うちうちのことなれば(私的な身内ごとなので)、あまたにも流れずやなりにけむ(配下の者にはお流れのお盃が回らなかったのか)、また書き落してけるにやあらむ(もしくは歌詠みは続いたものの、書き落としてしまったのかもしれません)。\*「ゆゑゆゑし」は<いわれありげだ、おももしい、風格がある>と古語辞典にあるが、この場面は<ご兄弟に親しんでいる>のだから<所縁を懐かしむ>という形容に違いない。

\*楽所遠くておぼつかなければ(楽人たちの演奏場所が遠くて音曲の賑わいが物足りなかった)ので、御前に御琴ども召す(方々は御自分たちで楽器を演奏なさいます)。\*「がくしょ・がくそ」は<平安時代、宮中の桂芳坊(けいほうぼう)にあって、雅楽をつかさどった所。天曆2年(948)設置、明治3年(1870)雅楽局に統合。雅楽寮の後身にあたる。がくそ。>と大辞泉にあり、宮中の音楽教室のことでもあったようだが、此処では当日の<担当官による演奏場所>のことだろう。

兵部卿宮、琵琶。内大臣、和琴(わごん、六弦)。箏の御琴(さうのおんこと、十三弦)、院の御前に参りて(まゐりて、用意されて)、琴(きん、無柱七弦)は、例の太政大臣に賜はりたまふ(例によって名手である太政大臣に帝はお与えなされた、)。\*せめきこえたまふ(演奏をご所望なさいます)。さるいみじき上手のすぐれたる御手づかひどもの(このような格別上手な優れた演奏者たちによって)、尽くしたまへる音は(奏でられた曲は)、たとへむかたなし(例えようも無く素晴らしいものでした)。\*「責む」は<責める、咎める>の意もあるが、此処では<せつつく、催促する>。

唱歌(しゃうが、演奏に合わせる歌)の殿上人あまたさぶらふ(の歌い手を仕える若い側近たちが多数控えて催馬楽を歌います)。「\*安名尊(あなたふと)」遊びて、次に「\*桜人」。\*「安名尊」はくああ尊い=いや目出度い>と囃し立てる素朴で率直な祝い歌、ということらしい。\*「さくらびと」の「さくら」は地名のようだが、その春を思わせる曲名と、女に会いに行く男を同僚がからかうような明るくくだけた内容がこの宴席に合う、ということらしい。

\*月おぼろにさし出でてをかしきほどに、\*中島のわたりに、ここかしこ篝火ども灯して、大御遊びは(おほみあそび、この園遊会は)やみぬ(終わりました)。\*旧暦二月末は今の三月末と見なして、13夜なら18時前、15夜なら20時前、17夜なら22時くらいの見当だ。\*「なかじま」はく庭園の池の中にこしらえた島>とのこと。

## [第二段 弘徽殿太后を見舞う]

夜更けぬれど(夜も遅くなりましたが)、かかるついでに(訪れたついでに)、大後の宮(おほきさいのみや、弘徽殿太后が)おはします方を(院内にお住まいのお部屋を)、よきて訪らひきこえさせたまはざらむも(除けてお見舞い申し上げなさないというのも)、情けなければ(しのびないので)、\*帰さに渡らせたまふ(帰りがけに帝はお訪ねなさいます)。大臣もろともにさぶらひたまふ(源氏大臣もお供申し上げなさいます)。\*「かへさ」はく帰りがけ>。

后(きさき、大後は)待ち喜びたまひて(帝を喜んでお迎えなさり)、御対面あり(御対面なさいました)。いといたう\*さだ過ぎたまひにける御けはひにも(そのととてもたいそうお年を召された御姿にも)、故宮を思ひ出できこえたまひて(帝は故母宮を思い出し申しなさって)、「かく長くおはしますたぐひもおはしけるものを(このように長生きなさる御方もいらっしゃるものを)」と、口惜しう思はず(母宮の早すぎた死を無念にお思い為さいます)。\*「さだ過ぐ」はく時機を逸する>と古語辞典にあり、注にはく弘徽殿太后は、この時、五十七、八歳ぐらい。>とある。藤壺宮は享年37歳。

「今はかく古りぬる齡に(今ではこのように老けた年になって)、よろづのこと忘れはべりにけるを(何もかも忘れてしまっておりますが)、いとかたじけなく渡りおはしまいたるになむ(まことにかたじけなくもお越し頂きましたので)、さらに昔の御世のこと思ひ出でられはべる(再び故院の時代のことが思い出されてまいります)」

と(と大後は)、うち泣きたまふ(お泣きなさいます)。

「\*さるべき御蔭どもに後れはべりてのち(頼みにしていた人々に先立たれてから)、春の\*けぢめも思うたまへわかれぬを(新春の喜びも存じられませんでした)、今日なむ慰めはべりぬる(今日やっと所縁深い太后にお会いできて気持ちの整理が付きました)。またまたも(では、また改めまして、お目に掛かります)」\*「さるべきみかげども」は大後の言った「昔=桐壺院」を受ければ帝はく両親>のことを言ったようにも見えるが、一昨年は母宮ばかりか太政大臣や叔父宮も亡くして、実際にこの一年は頼りを失って気落ちしていたのだろう。とはいえ、故院が実父ではないという意識は、いくら帝自身は表立っての敵対関係には無くても、少なくともこの太后の前では持たなかったに違いない。\*「けぢめ」はく区別、変化>で、忌明けで迎えた「春のけぢめ」はく新春の慶び>。

と聞こえたまふ(帝はお話なされます)。大臣もさるべきさまに聞こえて(源氏大臣も然るべくご挨拶なさって)、

「ことさらにさぶらひてなむ(また改めて伺います)」

と聞こえたまふ(と申し上げなさいます)。のどやかならで帰らせたまふ響きにも(しみじみとしたお話もせずにお帰りなさろうとする大臣の素振りと言調に)、後は、なほ胸うち騒ぎて(大后はやはり心穏やかならずに)、

「いかに思し出づらむ(かつての私の冷遇を、大臣はどのように思い出して御出でなのだろうか)。世をたもちたまふべき御宿世は(光君が政権をお執りになるという宿命は)、消たれぬものにこそ(消し去れないものだったのだから)」

と、いにしへを悔い思す(過ぎた日の事を悔やみなさいます)。

\*尚侍の君も(実質で朱雀院の正夫人として同居なさっている故藤原右大臣家の六姫も)、のどやかに思し出づるに(昔を穏やかに思い出せば)、あはれなること多かり(感慨深いことが多かったのです)。今もさるべき折(今でも折に触れて)、\*風のつてにもほのめききこえたまふこと絶えざるべし(風の伝手ほどの偶の便りが光君から続いていたようです)。\*「ないしのかんのきみ」は光君との密通があって、女御の身分では入内できず、中宮の宣旨は受けられなかった。しかし、それでも朱雀院の最愛の夫人だった。ところで、故藤原右家の長女が桐壺帝の第一女御であった弘徽殿大后であり、四の姫は内大臣の正妻であり、この夫人が六姫なのであり、この園遊会の盛況を見ても右家の勢力と財力は一定規模で維持されているのであり、朱雀院の存在感は決して小さくないのである。\*「かぜのつて」は注に<語り手の推量。源氏が朧月夜に手紙を差し上げるこの意。>とある。

後は、朝廷に(おほやけに、帝の御政道に)奏せさせたまふことある時々ぞ(ご意見を申し上げなさることがある時などに)、\*御たうばりの年官年爵(賜り物の年給額が)、何くれのことに触れつつ(何かの用立てに不足するなど)、御心になはぬ時ぞ(ご不満のある時には)、「命長くてかかる世の末を見ること(長生きしてこんな惨めな思いをするとは)」と、取り返さまほしう(思いのままに裁定できた朱雀帝の時代を取り返せないものかと)、よろづ思しむつかりける(多くの不平を申しなさいます)。\*「たうばり」は<賜り物>。「年官年爵」は「つかさかうぶり」と言い、本来は「司冠=職権と身分=官位」を意味するようだが、「年官年爵」と表記されるものは正に「年官(ねんくわん、名誉職務に対する年給)」と「年爵(身分保障の年給)」の額、とのこと。

老いもておはするままに(年をお取りになるほど)、さかなさもまさりて(意固地になられて)、院も\*くらべ苦しう(院も持て余して)、たとへがたくぞ思ひきこえたまひける(説得し切れないと諦め申しなさっていらっしやいました)。\*「比べ苦し」は<(例え話で道理を説明することでは)機嫌をとりにくい、宥め切れない>。

\*かくて(ところで)、大学の君(学生の若君は)、その日の文うつくしう作りたまひて(その日の勅題の漢詩を上手にお作りになって、見事に省試に合格されて)、\*進士になりたまひぬ(文章生

にお成りでした)。年積もれるかしこき子どもを選らばせたまひしかど(何年も勉強を重ねた優秀な者ばかりを帝はこの日の受験者に選びなさっていたが)、及第の人、わづかに三人なむありける(合格者はわずかに三人だけなのでした)。\*此処の「かくて」は第二章第六段の若君の寮試験合格とその後の引き続いての勉強生活に、時間軸としては繋がっている。とって第三章の冒頭を見ると、ダル・セーニョのセーニョのように「かくて」と記されていた。しかし、第三章から此処までの若君およびその周辺の事情説明の膨らましの量が多すぎて、この「かくて」をくこうして>と言うとこの園遊会での経緯だけを受けてしまいかねないので、<ところで>と全体の事情説明を参照する言い換えにした。\*「しんじ」は<式部省の官吏登用試験に及第した者>と古語辞典にあり、即ち省試に合格した公文書作成の有資格者たる「文章生(もんじゃうしやう)」だ。

\*秋の司召に(秋の中央官辞令で)、かうぶり得て(若君は官位を得て)、\*侍従になりたまひぬ(従五位下に任ぜられました)。\*「あきのつかさめし」は<中央官の任命>とある。此処で一気に、仲春二月の花見の話から、仲秋八月の任官辞令に話題が飛ぶ。\*「じじゅう」は権威ある中務省の天皇側近職で、管理職ではなく護衛も兼ねた実務職だったようだが、業務自体は次第に蔵人が勤めるようになったらしく、官位相当制での身分を示す職名と考えて良さそうだ。

かの人の御こと(かの幼馴染みの姫君を)、忘るる世なけれど(忘れる日々ではなかったが)、大臣の切にまもりきこえたまふもつらければ(内大臣が厳しく姫を囲い申しなさるのが支障となって)、わりなくてなども対面したまはず(無理にどうにかしてまでとはお会いなさいません)。御消息ばかり(お手紙だけを)、さりぬべきたよりに聞こえたまひて(季節柄や折に触れて差し上げなさって)、かたみに心苦しき御仲なり(互いに心苦しい御仲なのでした)。

### [第三段 源氏、六条院造営を企図す]

大殿(源氏大臣は)、静かなる御住まひを(落ち着ける御住まいを)、同じくは広く見どころありて(出来ればもっと広くて趣きがあつて)、ここかしこにておぼつかなき(あちこちに別居して気懸かりな)山里人(やまざとびと、山荘の明石君)などをも(などの縁者の多くを)、集へ住ませむの御心にて(一緒に住ませようと言う御心積もりで)、六条京極のわたり(六条の街外れ一帯に)、中宮の\*御古き宮のほつりを(梅壺中宮の旧邸周辺を)、四町を(よまちを、四つの区画を)こめて造らせたまふ(入れ込んだ設計で造営なさいます)。\*「おんふるきみや」は注に<秋好中宮が母六条御息所から伝領した旧宮。六条院はそれを含めて四町の敷地に造営される。>とある。また「四町」は<四つの区画>だが、平安京の条坊制に於いて「一町(約 120 m<sup>2</sup>)」が公卿に与えられる標準の区画だったらしく、その四倍の広大な敷地がこの物語でも想定されていた、というのが定説とのこと。これに付いては、史実にある源融(みなもと)の河原院が同位置で同程度の規模だった、と考えられているらしい。調査に拠ると、河原院はざっと現在の北は五条通、東は鴨川、南は六条通、西は富小路通、で囲まれる辺り一帯だったらしい。

\*式部卿宮(しきぶきやうのみや、式部省長官である帝の母方の伯父宮が)、明けむ年ぞ五十になりたまひける御\*賀のこと(来年には五十歳におなりになる御長寿祝いを)、対の上思し\*まうくるに(その実の娘である二条院の正夫人が心積もりなさっていたので)、大臣も(殿も)、「げに、過ぐしがたきことどもなり(それは疎かには出来ないな)」と思して(とお思いになって)、「さや



うの御\*いそぎも(その際の御祝宴も)、同じくめづらしからむ御家居にて(出来れば新居で致したい)」と、\*いそがせたまふ(完成を急がせなさいます)。 \*「式部卿宮」は故藤壺中宮の実兄である。そして紫の上の実父である。ただ宮家ながら、藤原家の特に本流とは縁遠かったようで、藤壺が桐壺帝に見初められてどうにか中央に留まれた、といった家柄だったらしい。それが今や、堂々たる式部省の名誉長官である。尤も、光君の出世には及びも付かないが。 \*「賀」は「賀の祝い」で<長寿祝い、四十歳を初老として以後十年ごとに長寿を祝う>と古語辞典にある。 \*「まうく」は「設く」で<準備する>。「思し設く」は<心積もりをする>。 \*「いそぎ」は<飲食の用意>で、「おんいそぎ」は<御宴席>。 \*「いそがす」は<急がせる>。

年返りて(年が改まると)、ましてこの御いそぎのこと(さらにこの御祝宴のことについて)、御\*としみのこと(長寿祝い恒例の解禁会食の膳立てや)、楽人、舞人の定めなどを(座興の音楽と舞踊の出演者の選定を)、御心に入れていとなみたまふ(殿は受け持って手配なさいます)。 \*「としみ」は「落忌(おとしみ)」と表記され<精進落としの事>と古語辞典にある。「しゃうじんおとし」は<潔斎明け、御清め直し>で<賀の祝いの時、初めに僧を招いて法要を行い、将来の福德を祈った。それが終わってから饗宴がある。>と説明されている。

経(会食前の念仏修行に飾る経巻や)、仏(仏像を取り揃えることや)、法事の日の装束(法要儀式に臨む際の衣服や)、禄などをなむ(記念品などといったものを)、上はいそがせたまひける(正夫人の対の上は準備させなさいます)。

\*東の院に(東院の夫人に)、\*分けてしたまふことどもあり(特にご助言頂く王家ならではの支度作法も幾つかありました)。御なからひ(夫人同士の御相談は)、まして(以前に増して)いと\*みやびかに聞こえ交はしてなむ(それは王家風の上品な物言いで穏やかに調整しあって)、過ぐしたまひける(準備を進めていらっしやいました)。 \*「ひんがしのみん」は注に<二条東院の女主人花散里をさす。>とある。 \*「わけて」は<特に、殊更に>。何を殊更に「したまふ」のかと言えば、後で洒落詞として明かす「みやびか」なる「ことども」である。そして、花散里が王家の作法に詳しいと言う記事は「薄雲」巻第二章の二年前の二条院の新春風景などに既にあった。 \*「みやぶ」は「雅ぶ」で<宮びる=王家ぶる>。「みやびかに」は<王家ぶるかのように=王家らしい上品さで>。

世の中響きゆすれる御いそぎなるを(京都中で話題持ちきりの盛大な長寿祝いの準備が進んでいることを)、式部卿宮にも聞こしめして(式部卿ご自身もお耳にされて)、

「年ごろ(この数年来)、世の中には\*あまねき御心なれど(世間には行き届いた御心配りを為さるが)、このわたりをば\*あやにくに情けなく(私たちだけには何故か冷淡で)、事に触れて\*はしたなめ(何かにつけて立場を不利にさせて)、\*宮人をも御用意なく(当家の姫を立后することに御心遣いが無く)、\*愁はしきことのみ多かるに(情けないことばかりが多くあったが)、つらしと思ひ置きたまふことこそはありけめ(大臣の方には当方に気に障るわだかまりがお在りだったのだろう)」 \*「あまねし」は<広く行き渡る>ともあるが<全てに行き届く>ともある。 \*「あやにく」は<折悪しく、不都合に>とか<はなはだしく>などとあるが、漠然として捉えにくい印象の形容詞だ。が、「あやに」は「奇に」と表記される副詞で<不思議なほど、驚くほど、むやみに>などとあるので、此処の「あやにく」はその形容詞化として見る。 \*「はしたなむ」は<はしたなくさせる、困らせる、恥をかかせる>。 \*「みやびと」は注に<式部卿宮家に仕える人々をさす。>とある。が、大臣が宮家の使用人に気遣いが無いことが特に不都合とは思えない。また、「大

宮人」は<宮中に仕える人>であり、<入内した娘>を親ながらにこう呼んだと考える方が自然だ。であれば、実際に「おんようい」は無かったのだから。 \*「うれはし」は<嘆かわしい、憂慮すべき>。

と、いとほしくもからくも思しけるを(残念にも辛くもお思いになったが)、かくあまたかかづらひたまへる人びと多かるなかに(こうも多く関係をお持ちになった女たちがいる中で)、取りわきたる御思ひすぐれて(とりわけ御愛情が深くて)、\*世に心にくくめでたきことに(これ以上望めない権勢の大臣に)、思ひかしづかれたまへる御宿世をぞ(大切にされていらっしゃる我が娘の御運勢というものを)、わが家までは\*にほひ来ねど(当家まではその栄華は及ばないが)、面目(めいぼく、名誉)に思すに(に思うのに)、また(その上)、 \*「世に」は<世情に於いて>で、「こころにくし」は<ねたましいほどすぐれている>で、「めでたし」は<目を見張る晴れがましき>で、「ことに」は評価のまとめを一般代名詞に代入したもので<ものとして>。 \*「にほひ」は物質の内面の要素が表に現れた魅力ある色や香りで、直接周囲に影響を及ぼす<威光、気品>。

「かくこの世にあまるまで(このように世間が沸き立つ)、響かし営みたまふは(評判になるほどに準備して下さるとは)、おぼえぬ齡の末の栄えにもあるべきかな(思い掛けない老後の栄誉とも言うべきだ)」

と喜びたまふを(喜びなざるが)、\*北の方は(宮の御内儀は)、「心ゆかず(気に入らない)、ものし(煩わしい)」とのみ思したり(とばかりお思いでした)。 \*宮の夫人は紫の上の継母で、意地悪な悪役に描かれていて、弘徽殿太后と共にこの物語に波風を立てる非常に重要な面白い人物だが、光君を傍目には魅力満載で本人も有能であり、しかしそれだけに例えば面喰いや腕自慢や道楽者などのような御し易い面が無く、独特で確固たる価値観を持ち、立ち回りも大胆な可愛げの無い人物像として描くことで、こうした悪役に説得力のある存在感を与えている、という作者の筆致および人物設定は、実在の人物や噂話を取材する際の感性や視点を含めて世の中というものへの洞察力が深い、ような気がする。

女御(立后はおろか女御として御所仕えに参って)、御まじらひのほどなどにも(後宮の妃にお仲間入りする時でさえ)、大臣の御用意なきやうなるを(大臣の御力添えが無かったようなのを)、いよいよ恨めしと思ひしみたまへるなるべし(御内儀は特に恨めしいと思ひ込んでいらっしゃったようです)。

#### [第四段 秋八月に六条院完成]

\*八月(はづき)にぞ、六条院(ろくでうのみん)造り果てて渡りたまふ(完成して引越しなさいます)。 \*注に<昨年の秋に造営に着工して一年で完成。>とある。確かに、話の順番としては昨秋8月の司召しに続いてこの六条院の話題となって、今の完成時に進んでいる。が、このような広大な建築工事にいったいどれほどの人区を要したのだろう。勿論、光君は絶大な権力者だろうし、完成といっても一通りなわけで、当時は受領を動員しての遷都さえ短期間で強行する技術力はあったのかもしれないが、いや、だからそれほどの大工事であり、大変な突貫事業だったのだろう。それが、その工事期間の話題が式部卿宮の長寿祝いだけだった、というのはずいぶん意外で拍子抜けするほどだ。前段で評価した女語りの欠陥なのだろうか。といっても、何も私は女官に建築現場の実況描写を期待してはいない。この六条院造営の構想自体は梅壺中宮を入内させた時から、いやもしかすると、御息所から娘の後見を託された時から、この地に御息所と過ごした時間の耽美さを思つて王朝文化の価値を求めよ

うと光君は夢想したかもしれず、何時の時点で四町の敷地を賜ったのかは分からないが、恐らくは二年前の太政大臣就任時の報奨かと思われ、その時点から着工されていたものを、去年になって義父の長寿祝いに託けて完成を急がせたという話の運びだったのではないかと、という気がするまでのことだ。急げば急ぐほど大掛かりになる工事は権勢の誇示そのものだったが、それを王家の寿ぎの名目で式部卿宮家に恩着せがましく言う光君を疎ましく思う宮家夫人に、私のような下々の者まで同情する。斯くて宮家は弥々惨めになるとい次第。

\*未申の町は(ひつじさるのまちは、南西の区画は)、中宮の御古宮なれば(ちゅうぐうのおんふるみやなれば、梅壺中宮の御実家があった場所なので)、やがておはしますべし(当然に中宮がお住まい為さるのでしょう)。\*注に<東南の町は秋好中宮、以下方位でその主人を紹介していく。東南の町は源氏と紫の上、東北の町は花散里、西北の町は明石御方である。>とある。「東南の町は秋好中宮」の「東南」表記は単純に「西南」の間違いなのだろう。ともあれ十二支方位は、現在の私の生活感では馴染みは薄い、一周十二時間の時計表示と同じなので分かり易い。

辰巳は(たつみは、東南は)、殿のおはすべき町なり(殿がお住まいになる区画です)。丑寅は(うしとらは、北東は)、東の院に住みたまふ対の御方(二条院東院の西の対にお住まいの花散里の御方)、戌亥の町は(いぬいのまちは、西北の区画は)、明石の御方と思しおきてさせたまへり(明石君の御方とお決めになって然るべく設計させなされたのです)。

もとありける池山をも(元の庭にあった池や山でさえ)、便なき所なるをば崩し変へて(新しい造営に不都合なところがあれば埋め戻しや築山をして)、水の趣き(流水の曲がりや)、山のおきてを改めて(山の配置を変えて)、さまざまに、御方々の御願ひの心ばへを造らせたまへり(それぞれお住まいになる方のご要望に沿って造らせなされたのです)。

南の東は(南の庭の東側は)、山高く(山を高く築いて)、春の花の木(梅や桜の春の花の木を)、数を尽くして植ゑ(数多く植えて)、池のさまおもしろくすぐれて(それらを映し出す池の美しさが素晴らしく)、御前近き前栽(殿の御座所近い庭先の植え込みには)、五葉(松)、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅(いはつつぢ)などやうの、春のもてあそびを(春を賑わす花々は)\*わざとは植ゑで(これ見よがしに全面には植えないで)、秋の前栽をば(秋の草木を)、むらむらほのかに混ぜたり(所々にそれとなく混ぜてあります)。\*「わざと」は<わざとらしく>で良さそうだが、もう少し言えば<これ見よがしに>。

\*中宮の御町をば(中宮がお住まいになるべき区画の南庭の西側は)、もとの山に(もともとあった築山に)、紅葉の色濃かるべき植木どもを添へて(紅葉の色が濃くなるカエデの木々を植え足して)、泉の水遠く澄ましやり(池に流れ込む水を澄んだ山深い湧き水に見立てて)、水の音まさるべき巖立て加へ(水音が際立つように岩を立て加えて)、滝落として(滝落しの工夫を施して)、秋の野をはるかに作りたる(その辺りに秋の草木を遠景に配置した作りで)、そのころにあひて(丁度今の季節に頃合って)、盛りに咲き乱れたり(荻原に萩や桔梗などが盛りに咲き乱れていました)。嗟峨の大堰のわたりの野山(大堰山荘から眺める野山さえ)、無徳にけおされたる秋なり(恵みに乏しく見劣りする秋の風情です)。\*この南庭西側の「御方々の御願ひの心ばへを造らせたま」うた描写は、三年前の秋の「薄雲」巻の記事に、光君を実父と知った帝が光君に譲位を考えて太政大臣就任の内示の際に相談したが、光君は固辞するばかりか太政大臣就任も立后への思惑や諸般の事情からその全権職就任は見送って、位

階の二位から一位へという待遇だけを上げて貰う処遇を申し出て、その体制で一先ず落ち着いた後に時の斎宮女御(今の梅壺中宮)が二条院に里下がりをした行があって、その際に光君が女御に春と秋のどちらが好きかと問う場面に、女御が秋の方が故御息所が偲ばれると応えたことに符合する。「薄雲」巻の校柱で指摘されているように、これが六条院設計上の御方々への意向調査の一環だとするなら、造営は二年前の太政大臣就任後ではなくて、三年前の昇給報奨でこの敷地を賜っての着手と順次着工に取り掛かったのかもしれない。

北の東は(北東の区画は)、涼しげなる泉ありて(涼しげな湧き水が施されてあって)、夏の\*蔭によれり(夏向きの庭造りでした)。 \*「かげによる」の「かげ」は、「蔭(日陰、木陰、暗がり)」ではなく、「影(形状、雰囲気、情緒)」なのだろう。で、「影に拠る」は<その姿に似せる>だから、「夏の影に拠れり」は<夏の情緒を模した庭造りだった=夏の趣向だった>だ。

前近き前栽(座敷前の庭には)、\*呉竹、下風涼しかるべく(呉竹の下を通る風が涼しくなるように)、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく(小高い森に見えるほど密生させた遠景が風情のある)、山里めきて(山里のようで)、\*卯の花の垣根ことさらにしわたして(手前には卯の花の垣根を野趣豊かに囲い付けて)、\*昔おぼゆる花橘(古風な花散里に相応しい花橘や)、撫子(なでしこ)、薔薇(さうび)、\*苦丹(くたに)などやうの花、草々を植ゑて、春秋の木草、そのなかのうち混ぜたり。 \*「呉竹(くれたけ)」は「淡竹(はちく)」ともいうらしく、<イネ科の植物。高さ約10メートル。質は堅く、表面に白粉がつき、節に二環がある。茶筌(ちゃせん)・提灯・傘の骨などに使われ、竹の皮は草履や包装用、竹の子は食用とする。中国の原産。呉竹(くれたけ)。唐竹(からたけ)。>と大辞泉にある。私には竹の種別は良く分からないが、図鑑で見るとハチクは二環節と笹の葉が印象的な竹林に相応しい姿に見える。 \*「うのはな」は<ウツギの花。緑の葉に白い花の色彩感と、旧暦四月に咲く初夏の季節感とから、万葉歌人に愛された。>と古語辞典にある。万葉集の歌は「楽しい万葉集」という Web サイトに「卯の花を詠んだ歌」が集められたページがあって、その多くがホトトギスとセットで詠まれている、と解説されている。また、教育唱歌の「夏は来ぬ」にある「卯の花の匂う垣根に時鳥(ホトトギス)早も来鳴きて忍び音洩らす夏は来ぬ」の歌詞に付いては、Web サイト「野草かんさつ事典」の「ウツギ」のページに、初夏にホトトギスが民家近くにやって来る状況の可能性が親切に解説されていた。ところで、「夏は来ぬ」はモーツァルト風の軽快な曲で初夏に相応しい曲調とは思いますが、ずいぶん前に女声合唱で聞いた時には歌詞の意味が分からなくて、各単語が耳に親しいだけに奇妙な感じを覚えたものだ。そして今、改めて歌詞を見直すと、歌詞だけ見れば文語調で収まりが良いものの、語調と曲調の相性に昔この曲を聴いた時と同じような違和感を、また改めて感じてしまう。やはりこの曲では、明治時代の気分こそ窺われるものの、この歌詞で表された「ホトトギスの忍び音」から静かに夏の訪れを思う情感は伝わって来ない。それでも「うのはな」の語感を聞き覚えさせてくれた功は思う。 \*「むかしおぼゆ」は<古風に思われる、昔が偲ばれる>と古語辞典にある。また、注には<「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(古今集夏、一三九、読人しらず)を踏まえる。>とある。が、この区画の女主人たる花散里との関連で言うなら、先ずは「花散里」巻で光君が詠んだ「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ」(和歌 11-03)を見直すべきだろう。この歌は故桐壺院の女御にして故院亡き後に身寄りの無かった麗景殿女御に、光君が世話して住ませた里邸の風情を詠んだもので、延いてはその邸に同居していた麗景殿女御の妹三ノ宮を「花散里」と呼称する事になったものだが、その時の注釈には、この歌の底歌は上掲「五月待つ…」の引歌と共に、「橘の花散里の郭公片恋しつつ鳴く日しぞ多き」(万葉集八、一四七七、大伴旅人)が指摘されていた。郭公(ホトトギス)は不気味な夜鳴き鳥でもあって、死界からの使いという見方もあるほどの<未練がましき>を表す語でもあるらしく、その執念が「花散里」を<恋ふ>情念であり、残り香の強い「橘」が「花散里」を艶かしく修辭する、という構成。 \*「くたに」は<植物の名。リンドウ、またボタンともいうが未詳。>と大辞泉にある。夏の花の列挙なのだから秋山のリンドウは違うと思うが、まあ分からない。

\*東面は(ひんがしおもては、その北東区殿舎の東向きには)、分けて(別棟で)馬場の御殿作り(うまばのおとどづくり、乗馬競技の観戦場を設けて)、埒結ひて(らちゆひて、馬場を柵で区切った殿舎側には)、五月の御遊び所にて(さつきのおんあそびどころにて、夏の園遊場所として)、\*水のほとりに菖蒲植ゑ茂らせて(池の水辺に菖蒲を植え茂らせて)、向かひに(池の向こう側には)御厩して(みうまやして、御馬小屋を造って)、世になき(最上の)上馬どもを(じゃうめどもを、名馬数頭を)ととのへ立てさせたまへり(整備させなさっていらっしやいました)。\*「おもて」という言い方は、敷地平面図上で見る方角ではなくて、殿舎から見た方角かと思う。いや、方角自体はどちらでも同じことだが、つまり読者が思い描くべき絵は平面図ではなく立面図なのだろう。とは言え此処等辺の描写に付いては、殿舎や庭園の配置が良く分からないので、「季刊大林」サイトの「六条院復元」ページや池浩三モデルなるものの書籍写真などを参照して読んでいて、その設計実務上の考察は大変に参考になるものの、言い換えに際しての本文との馴染みに於いては、私には全体像も細部も掴み切れ無い。\*「みづ」は遣水の流れなのか、池なのか。具体像は全く分からないので、「向かひに御厩して」から逆推して、馬小屋を遠ざける為には池が間に在ったほうが良さそうだと思い、池にした。馬小屋は臭そうだから。

西の町は(北西の区画は)、北面\*築き分けて(きたおもてきづきわけて、区画本殿の北向きに土塀を築いて更に区分けして)、\*御倉町なり(倉庫群舎を設けました)。\*「きづく」は<「築地(ついち、土塀)」を造作する>と読むらしい。注に<明石御方の御殿のある冬の町。その北半分は築地で区切られて御倉町となっている。>とある。\*「みくらまち」に付いては、当時の寝殿造様式や内裏御所様式の考察に基づいたであろう専門家に拠る六条院再現の配置図が有難い。

\*隔ての垣に松の木茂く(東区画との境の小柴垣前には松の木を密に植えて)、雪をもてあそばむ\*たよりによせたり(雪を楽しむ大堰山荘の風情に似せてありました)。\*「へだてのかき」は何処の<区切り>なのか分からない。が、「北の東は」と北東区画を説明した後で、「西の町は」と北西区画に目を転じる話の運びからして、この「垣」は北東区画と北西区画の「隔て」と読んで置く。上の「北面築き分けて御倉町なり」は「分けて」とあるので、この「隔ての垣」には繋がらない独立した文で、情景説明に入る前の区画上のお断り、のようだ。私には分かり難いが、明石君の御方の区画は半町ほどで、それでも狭いとは言えないだろうが、大林組の玉上モデルを敬意して、此処の殿舎は対屋のみで南庭に池も無かった、ように思っておこう。\*「たより」は此処では<よすが、ゆかり>で、明石君の母尼君が残る大堰山荘の風情なのだろう。ただ、大堰の雪の場面の印象は「薄雲」巻の出だしの4年前冬の「母子の雪の別れ」であり、明石君が姫の将来を思って「双葉の松に引き別れ」ることの因果を呑み込んだという切なさなので、「雪をもてあそばむ」気分とは馴染まない気もするが、懐かしい所には違いないか。また、この西北の敷地は河原院で源融が塩竈を営んだとされる場所で、現在でも当該地に京都府京都市下京区本塩竈町という地名があり、明石と塩竈なら縁が有る。何しろ塩竈といえば海人であり、海人といえば尼であり、これは冬ではないが10年前の新年参賀にその前年末の出家で権勢離れをした藤壺入道を光君が訪ねた際の、宮城松島の海人の塩焼きに掛けた軽妙な歌の贈答は、読者の私の心にも残っているのだから、光君にも印象深かったと思いたい。だから「雪をもてあそばむ」という言い方には、塩焼きの煙や塩自体の白さなどの連想を作者は意図しているのだろうか、とも考えてみた。にも関わらず、此処の描写から何より私が思い出すのは、未摘花の寂れ屋の雪の朝である。今でもそうだろうが、寒さは笑い飛ばすに限る。多分、未摘花自身にとっても。

冬のはじめの朝(庭の趣向としては初冬の朝に)、霜むすぶべき菊の籬(可憐に霜をつけるような菊を引き立てる粗組みの竹柵を手前に立てて)、われは顔なる(遠景には見事な紅葉がその存在を主張する)\*柞原(ははそはら、母なるどんぐり林や)、をさをさ名も知らぬ(良くは名前も分か

らない)深山木どもの(みやまぎどもの、山深い所に生える田舎風な木々の)、木深きなどを移し植ゑたり(枝の茂ったものなどを移し植えてありました)。\*「ははそ」はくコナラなど、ブナ科コナラ属の植物の別名。[季]秋。>と大辞林にあり、コナラはざっとドングリの木らしい。また、その音からく母(はは)の意にかけて用いる。>ともあり、「ははそはら」は特に和歌でく母の意を含むことが多い>と大辞泉にある。姫君の母御を洒落言葉にするために秋の木まで出してきたわけで、「われは顔なる」も「深山木」も明石君の趣味というよりは、作者の言葉遊びの感が強い。そして、そこに同程度の身分であろう作者が受領の娘たる明石君に寄せる親近感を見て取れる、などと地下の私が偉そうに言っても受領は十分に雲上人か。

#### [第五段 秋の彼岸の頃に引っ越し始まる]

\*彼岸のころほひ渡りたまふ(八月中頃の秋の彼岸の時分に源氏大臣は二条院から六条院に引っ越しなさいます)。\*注に<秋の彼岸。秋分の日を中心とする前後七日間。>とある。彼岸はく向こう岸>だから故人を偲んで墓参りをする、というのは尤もらしいし、現在でも定着している仏事ではあるが、必ずしも仏典に拠る行事ではなく季節柄の風習とのこと。日本で特に盛んということなので、日本の季節感に合っているのだろう。勿論、否定されるべきものではないが、故人を偲ぶのも墓参りも、本来は何時でも構わないと言うか、何時も心掛けて然るべきものかもしれない。寧ろ、この物語で「彼岸のころほひ」と説明される言い方こそが、当時の生活観の傍証の一つにもなる、ほどのものらしい。また、「彼岸」というと<春の彼岸>を意味し、<秋の彼岸>は「秋の彼岸」という、とのこと。ところで、春分と秋分は主要な節中気である。因みに2010年のカレンダーを見ると、秋分の日は9月23日であり、その日は旧暦の8月16日に当たると記されている。これは、太陰太陽暦では8月に秋分が有るのではなく、秋分八月中になる日を含む一朔望月を8月に決めることに拠るもので、この引っ越しの日は八月中には違いないが、初旬か中旬か下旬だったかは年号が不明なので実は分からない。「中頃」は曖昧表現。

ひとたびにと定めさせたまひしかど(皆一度にとお決めになっていたものの)、騒がしきやうなりとて(それでは余りにも大騒動になりそうなので)、中宮はすこし延べさせたまふ(中宮は少し日延べなさることになりました)。例のおいらかにけしきばまぬ花散里ぞ(また、例によって穏やかで何事にも出しゃ張らない花散里の御方には)、その夜(時刻をずらして同日の夜に)、添ひて移ろひたまふ(若君に添ってお移り為さいます)。

春の御しつらひは(殿がお住まいになる春の御殿の屏風や調度の絵柄や謂れは)、このころに合はねど(この秋の季節柄には合わなかったが)、いと心ことなり(実に見事な出来栄えでした)。

御車十五(みくるまじふご、牛車十五台に女房の五十人ほどを乗せて)、御前四位五位がちにて(ごぜんしるごゐがちにて、付き従うのは部長課長の精鋭ばかりで)、六位殿上人などは(管理官としては最下位の係長などは)、さるべき限りを選らせたまへり(縁故の有る者に限った最少編成の随員を選んでいらっしゃいました)。\*注に<紫の上の二条院から六条院への引っ越し。一台の車は定員四人。約四、五十人の女房が付き従ったものか。四位五位の前駆及び特別の関係ある六位の殿上人が警護した。>とある。戦闘服の兵隊がぞろぞろ付き従う大行列ではなかった、ということかもしれないが、立派な制服の管理官たちが護衛する行列は、その威厳たるや大行列以上の麗々しさではなかったのだろうか。それに牛車十五台は決して小さな編成では無い。

\*こちたきほどにはあらず(大袈裟になり過ぎず)、世のそしりもやと省きたまへれば(世間の非難も受けないようにと簡略に為さったので)、何事もおどろおどろしういかめしきことはなし(移動中に威張って通りの者を押し退けるような事はありませんでした)。\*「こちたし」は「言痛し・事痛し」と表記するらしく、<はなはだしい、ひどい、うるさい>または<仰々しい>と古語辞典にある。しかし、六条院の造営自体が京中の評判になるほどの大工事で、この引越しも太政大臣ならではの麗々しきであったのは客観的な事実なので、その行列自体がこれ見よがしに威張らなくても、既にその威厳は周囲に見せ付けられているわけなので、今さらは却って威張らない優雅さこそが弥々世人には手の届かない雲上人を印象付けることになる、という描写なのだろう。謙遜する余裕である。

今一方の御けしきも(もう一組の東院からの引越しの御様子も)、をさをさ落としたまはで(本院の行列に見劣りの無いように大臣は編成なさって)、侍従君(じじゅうのきみ、侍従になっていた若君に)添ひて(付き添って)、そなたはもてかしづきたまへば(花散里がお世話申しなさっていたので)、げにかうもあるべきことなりけりと見えたり(確かに対の御方が若君の母親代わりなのだと衆人にも分かったのです)。

女房の曹司町ども(女房たちは自分たちの部屋の割り当てが)、当て当てのこまけぞ(身分や役目ごとに細かく区分されて作られていたのが)、おほかたのことよりもめでたかりける(他の何よりも嬉しかったのです)。

五、六日過ぎて、中宮まかでさせたまふ(中宮が御所から里下がりなさいます)。この御けしきはた(その御一行はまた)、さは言へど(何と言っても)、いと所狭し(大変な物々しきでした)。御幸ひのすぐれたまへりけるをばさるものにて(后になられた御幸運は言うまでも無く)、御ありさまの心にくく重りかにおはしませば(お人柄がご配慮のある王家らしい慎ましきでいらっしやったので)、世に重く思はれたまへること(御所内外での尊敬も)、すぐれてなむおはしませける(高く得ていらっしやいました)。

この町々の中の隔てには(この春夏秋冬の区画の仕切りは)、\*塀ども(それらの別々な情緒を保たせるように数々の塀を設けると共に)廊などを(行き来が便利なように数々の廊下を)、とかく行き通はして(それぞれに行き通わせて)、気近くをかしきあはひにしなしたまへり(互いに親しく面白味のある間柄になるように殿は工夫なさっていらっしやいました)。\*この塀と廊の描写に付いては「季刊大林」サイトの「六条院復元」ページに解説が詳しい。同サイトの説に従うかどうかは別にして、この六条院の区画ごとに季節感をはっきり区切った設計は大きな敷地の貴族の邸にしても相当に独特だったらしく、またそれぞれを繋ぐ廊下も独特な様式ではあったのだろう。現に作者がわざわざ斯う書くほどの珍しさだった、と理解かつ留意して今後の六条院の場面は読み進みたい。

[第六段 九月、中宮と紫の上和歌を贈答]

長月になれば(九月になると)、紅葉むらむら色づきて(紅葉が部分部分に色付いて来て)、宮の御前えも言はずおもしろし(宮がお住まいの秋の町のお庭が何とも素晴らしい)。風うち吹きたる夕暮に(風が吹き過ぎて行った落葉散る夕暮れに)、御箱の蓋に(塗り箱の蓋をお盆にして)、色々の花紅葉をこき混ぜて(色々な紅葉を花に見立てて盛り寄せて)、\*こなたにたてまつらせたまへ

り(宮は此方の正夫人に御贈りあそばされます)。\*「こなたに」については、注に<秋好中宮が紫の上に。前に「御箱」とあり、ここに「せたまへり」という最高敬語が使用されている。>とある。確かに贈り手については、「宮の御前(みやのおまへ)」とある秋の町の庭の場面なのだから、中宮というのは分かり易い。が、受け手の「こなた」は語り手にとって六条院の主殿である春の町になると思うが、それが<殿>ではなく<紫の上>となるのは自明なのだろうか。ひどく舌足らずに感じるが、恐らく注釈の意味する所は、この文が中宮の目線だからという説明なのだろう。事情は意外に複雑だ。六条院は中宮の生家があった場所に立地しているが、中宮の持ち家なのではなく光君の御殿であり、中宮は親代わりである光君の御殿に里下がりしているのである。ただし光君は、この地が中宮の生家とは即ち六条御息所の邸地であったことは大切に考えていて、御息所亡き後の修繕や管理に気を配り、建て替えの際も秋の町に付いては建物や庭の配置を旧邸となるべく変えないよう留意したとの記述もあった。そうした光君の配慮も然り乍ら、何より重大なのは中宮が今上帝の後とは即ち皇后という身分にあることである。中宮は親の家に里下がりしていながら、親よりも身分が上である。また、その厳かな身分には、人を直接名指しする事無く、何らかの代名詞で呼ぶことが相応しい。そこで、「こなた」と間接表記するも、「こなた」は家の中の主人を指し、六条院の主人は光君だが、いくら皇后でも親を指示代名詞で呼ぶのは非礼である。これが撰関家の実力を意味するとも思うが、ともあれ「こなた」は主人筋の親以外の人なので<正夫人>を指すことになる。というように考えてみたが、殿も所詮は親代わりであり、立場上の義理なら紫の上も同じ親代わりかもしれない訳だから、是で良いのかどうかは分からない。自分なりの辻褄合わせで遊んでみただけだ。ただ、遊んで見たとは言っても、何が問題なのかさえ見失いそうなくらい消化不良で、少しも楽しく無い。そして、客観的な物語表記の場面では何よりも公式な身分関係に基づかなければ、この時代の表記法自体が成立していない筈だ、という疑問だけが今も残ったままで、この文の分かり難さは何とも気持ち悪い。

大きやかなる童女の(大柄な童女が)、濃き裃(こきあこめ、濃い赤紫の内着に)、\*紫苑の織物重ねて(しをんのおりものかさねて、薄紫の上着を重ね着して)、\*赤朽葉の羅の汗衫(あかくちばのうすもののかざみ、枯葉色の黄色い透き織りの飾り掛け着を羽織って)、いといたうなれて(年長らしく物慣れて)、廊、渡殿の\*反橋を渡りて参る(縁側から渡り廊下の反り橋を通してその御使いに遣って来ます)。\*「紫苑色」の襲ねは諸説あるようだが、「しをん」は「しをに」で「紫句」の若々しさを思えば、紫と薄紫のグラデーションよりは蘇芳と薄紫の可憐さを取りたい。\*「赤朽葉」は<赤い枯葉>なのだから正に紅葉の落葉かとも思うが、「羅」は下が透けて見える薄い織物らしく、薄紫の上着に映える掛け物なら黄色い方が良さそうだ。\*「そりはし」は水の上に架かる橋なのだろうが、この南西区から東南区に渡ってくる「廊、渡殿の反橋」という書き方は、南西区東の対端から屋根の無い廊が東南区西の対端まで繋がって、東南区西の対から正殿までの屋根付き廊下に反橋が架かっていた、ような印象を受ける。が、良く分からない。

\*うるはしき儀式なれど(事改まった麗々しい贈り物の作法だったが)、童女のをかしきをなむ(童女の可愛らしさの方がこの遣いには女房より勝っていると)、え思し捨てざりける(お見捨てなさらずお選びなされたのです)。\*「うるはし」は<麗々しい、端正な、見事な>の語意とされ、此处では「儀式(作法)」を形容するのでもきちんとした、正式の>といったところだろうが、私邸で正式の儀式もないので<事改まった>ぐらいか。

さる所にさぶらひなれたれば(童女は御所勤めに慣れていたので)、もてなし(仕草や)、ありさま(物腰が)、他のには似ず(他の所の童女とは違って)、このましうをかし(仕付けが良く出来ていて見事でした)。御消息には(お手紙の贈歌はこうでした)、



「心から 春まつ園は わが宿の 紅葉を風の つてにだに見よ」(和歌 21-15)

「春には早い御庭にも せめて紅葉の移ろいを」(意識 21-15)

\*注に<秋好中宮から紫の上への贈歌。秋の町の素晴らしさを言ってよこした。>とある。であれば、是を真面に受け止めたら相当な嫌味に見える。「風の伝手」は<風の便り→現況報告>。「だに」は<せめて是を>。「見る」は<理解する>で、「見よ」は命令形だが<命令では無く親しげな呼び掛け若しくは言い放ち>。なので、この歌は「春が待ち遠しい其方の御庭は此方の庭の見事なこの紅葉を見る事で今はまだ秋だと思い知りなさいな」という筋になる。のではあろうが、この歌は子供のごっこ遊びに模した紅葉の贈り物に添えた歌であり、是を紫の上に贈るという体裁を中宮が演出することで、本義は秋の町の庭の造作の見事さを童心に返った無心で讃える殿への感謝状にある、という六条院の和みを描写する作者の演出、なのだろう。中宮は、殿と上が住む六条院正殿が春の花木を集めた春の町である事を承知の上で、今の浮き立つ気分をわざと子供じみた茶目っ気で表現して、自分の庭の秋の時分での優位性を誇って見せた、という場面。

若き人びと(若い女房たちが)、御使もてはやすさまどもをかし(この御使の童女を囲んで明るい声で褒めるのも楽しい)。

御返りは(正夫人からの御返歌は)、この御箱の蓋に苔敷き(その御箱の蓋に苔を敷いて)、巖などの心ばへして(岩に見立てた石を置いて)、五葉の枝に(添えた五葉の松の枝に結び付けた紙にこうありました)、

「風に散る 紅葉は軽し 春の色を 岩根の松に かけてこそ見め」(和歌 21-16)

「風に舞い散る紅葉より 根張る(春)松(待つ)こそ楽しけれ」(意識 21-16)

\*注に<紫の上の返歌。秋よりも春が素晴らしいと、応酬する。>とある。いやしかし、この歌は私には非常に分かり難い。先ず、秋好中宮と紫の上との空気感が分からない。義理の親代わりとはいえ、皇后に「かるし」などと言いつ返せるほど紫君は中宮と親しいのか。年廻りは、第三段の式部卿宮の五十歳祝いに託けた慌しさの中ですりりと「年返りて」と語られていたので、光君がこの年で35歳、紫の上が8歳年下で27歳、秋好中宮は26歳とほぼ同じ年のようだから、広く身内と考えれば姉妹に近い友達感覚も有り得るかも知れない。というよりも、元々の中宮の「見よ」というくだけた贈歌の口振りからして、両者には王家血筋の出自という共通項もあってだろうか、意外に親近感を持ち合っていたらしい、と知るべきなのだろう。そうは言っても、その親近感と表向きの公式の立場をわきまえた言動には、互いに切り替えや距離感が必ずや明確にあっただろうに、そうした生活感が私にはやはり全く分からない。だから、全体が不確かさの中での解釈に成らざるを得ないという気持ち悪さのまま、止む無く歌自体の中身に進むことになる。基本的にこの贈答は戯れであり、歌と贈答品で組に成った冗句なワケだ。「岩根の松」は<(岩に根を)張る松→春待つ>という言葉遊びだろうから、「かけてこそ」はお返しの品の謎掛け遊びの心を解いた説明になっている。と同時に、「見む」の「む」は妥当性を示す助動詞なので、「軽い紅葉より重い岩にまで根を張る松の方が尊い」という理屈に<かけて>「春の景色は待つてでも見る価値がある」、という我を張った歌筋になっている。だが、いくら面白い言い回しをしてみたところで、贈られた紅葉の見事さに匹敵するお返しは秋の今の時節では春の町には出来ないのだから、是は率直ではあっても負け惜しみに過ぎない。それだけに可愛いくて他愛無いという面はあるかもしれないが、いい年をした女同士が子供じみた可愛いらしさしか演出出来ないというのでは些か腑に落ちない。

ましてや、今を時めく二人である。だから、「風に散る紅葉は軽し」にくあいにく今はお贈り下さった紅葉に見合うお返しは出来ませんが>という謝辞、「春の色を岩根の松にかけてこそ見め」にく春になったらどうぞ此方にお出掛け下さい>という招待、の挨拶文に其々が成っているように読みたいが、私如きには語感以上の説明は出来ない。という曖昧な気持ちも含めて、意識もくこそ〜けれ>の中途半端な言い換えにする。

この岩根の松も(返されたお盆の岩根の松に見立てた遊びも)、こまかに見れば(よく見れば)、えならぬ作りごとどもなりけり(とても上手く作ってありました)。とりあへず思ひ寄りたまひつるゆゑゆゑしさなどを(とっさに思い付きなされた夫人の趣向に富んだ機転を)、\*をかしく御覽ず(宮は面白くご覧になりました)。御前なる人びともめであへり(宮の女房たちも口々に褒め合っていました)。 \*注に<主語は秋好中宮。>とある。

\*大臣(殿はこの歌の贈答遊びの事をお聞きになって)、「この紅葉の御消息(中宮の紅葉のお便りには)、いとねたげ\*なめり(此方とはとても勝ち目は無さそうだ)。春の花盛りに(春の盛りになった時に)、この御応へは\*聞こえたまへ(改めてこの御返しは差し上げると良いだろう)。このころ紅葉を言ひ朽さむは(今の秋の時分に紅葉を言い負かそうとするのは)、\*龍田姫の思はむこともあるを(立田姫がどう思うかという聞こえも有るので)、さし退きて(此処は一步退いて)、花の蔭に立ち隠れてこそ(春になって桜の花盛りを味方につけてこそ)、強きことは出で来め(勝ち目も出て来るといふことでしょう)」 \*「おとど」という明示は場面転換だろう。後日ないしは他所で、光君はこの二人の遊戯を聞き知った、と読む。 \*「なめり(〜のようだ)」という推量は、「ねたげ」という<対抗手段が無いから憎むしかない>という評価に至った考察の結論だから、<勝ち目は無さそうだ>という諦観だ。 \*「聞こえ給へ」は命令形かも知れないが意味は呼び掛けだから、「花盛りに」は「こそ」の省略と見て、「給へ」は已然形の「給へば良かし」の省略文と取ることも出来そうだ。 \*「たつたひめ」は紅葉の名所たる竜田山を神格化した<秋の女神>という言い方、とのこと。「竜田山」は奈良県生駒郡斑鳩町にある山、とのこと。「龍田姫の思はむこともあるを」は額面どおりに取れば<神の怒りを買って不吉な事も有り得るから>だが、その皇后たる畏れ多い地位まで含めて梅壺中宮をからかうという源氏大臣の畏れ多さである。

と聞こえたまふも(とお話になるのも)、\*いと若やかに尽きせぬ御ありさまの見どころ多かるに(とても若々しい御姿で魅力に溢れていらっしやって)、いとど思ふやうなる御住まひにて(このように中宮も紫の上もそれぞれの町の出来栄えに満足していそうな、ますます思い通りという六条院のお暮らしぶり)、\*聞こえ通はしたまふ(御夫人方も和やかにお手紙を交わしなさいます)。 \*「いと若やかに」は注に<源氏の変わらぬ若々しさをいう。>とある。 \*「聞こえ通はしたまふ」は注に<主語は六条院の女君たち。『集成』は「理想的な六条院の生活ぶり」。『完訳』は「源氏には、自らの管理のもとでの女君同士の適度な交流も理想であった。六条院経営はそれを可能にしようとしている」と注す。>とある。ただ、之はむしろ「いとど思ふやうなる御住まひ」の説明かと思われ、つまりは中宮と紫君との言い合いは其々の庭の造作に満足しているからこそ、殿への感謝の示し方の競争という他愛無さというか和やかさというか、その幸福感を演出する語り方、なのだろう。

大堰の御方は(明石君は)、「かう方々の御移ろひ定まりて(このように他の方々の引越しが終わってから)、数ならぬ人は(高貴な方々に仲間入りできない私のような者は)、いつとなく紛らはさむ(何時とはっきり分からないうちに引っ越そう)」と思して(とお思いになって)、\*神無月

になむ渡りたまひける(十月になってお移りに成りました)。 \*注に<初冬十月。冬の町の主人公にふさわしい設定。>とある。

御しつらひ(お部屋の調度類や)、ことのありさま劣らずして(引越行列の規模も他の夫人に見劣りが無いようにして)、\*渡したてまつりたまふ(殿は御方にお渡り頂きなさいました)。 \*注に<主語は源氏。明石御方に対する重々しい待遇である。>とある。

\*姫君の御ためを思せば(入内に備える姫君の御将来の体裁を考えれば)、おほかたの作法も(ほとんどの場合の礼儀作法についても)、けぢめこよなからず(受領の家格だからといって明石君を他の夫人たちに劣るような区別をつける事無く)、いともものしくもてなさせたまへり(殿は大変重々しく処遇なされたのです)。 \*注に<『完訳』は「明石の姫君を将来の国母にと意図する源氏は、身分低い母君の格式を高めようとする」と注す。>とある。

(2010年10月5日、読了)